

おおくま愛人

会報 第三十六号

発行日 平成十七年九月三〇日
 編集人 南洲吟道会広報局
 発行人 理事長 吉 永 洲 神
 〒一五〇〇三五 東京都中野区白鷺二―三四―五
 (社) 日本吟道学院南洲吟道会
 ☎・FAX 〇三(三三三〇) 七〇〇九

連続制覇を祝す

全国大会合吟コンクール…またも優勝。

吉 永 洲 神

昨年の学院理事会にて同実行委員長を拝命し、さあ大変なことになったと思う間もなく、各本部長を集めて実行委員会を度々開催してポリシーを示しながら計画を進めました。幾多の障害を乗り越えて、愈々本番当日を迎えました。

女性軍の衣装の事を考えると、当日の朝だけでも雨が降らないようにと、只管お祈りしていましたが、祈りが通じてか、当日を含めて吟行会まで三日間降雨の無かつた事に天地自然の恩恵に深く感謝した次第であります。吟行会から帰った翌日は雨でした。ホットする事しきり。

92名の参加(四番目に多い)を頂き乍ら事情により退いて下さった方々にも感謝しております。皆様のご協力により盛會裡に大会、祝賀会、吟行会何れも事故も無くスムーズに終了致しました事に、深く感謝しております。

合吟コンクール参加選手25名の方々、よく練習に通って頑張って下さいました。金賞、銀賞受賞者だけを集めて丁度25名、流石の吟でした。優勝おめでとうございませす。二位との差15点、二位と三位の差3点、矢張り本物でした。返還したばかりの優勝カップが又還って来ました。目下、学院の優勝カップ三つ全部を、本会が保持しております。

祝賀会、吟行会で相馬盆唄の見事な演舞を披露して下さいました皆様、有難うございました。特別番組にご出演の皆様、素晴らしかった。祝賀会で、本会の皆様がアンコールに呼ばれて踊っておられる時、西坂詩龍事務局長代行が私の側にきて曰く「今日は、南洲吟道会に始まり南洲吟道会で終わるようですね」と。応えて曰く「あゝそのようだね」と。兎に角、本会のよき同志に恵まれた幸せを噛み締めた一日でした。

サンプラザの会場費支払い、記念文集の最終校正・発刊・支払い等処理中です。記念すべき創立25周年記念大会が、憧れのサンプラザ大ホールで開催出来たこと、合吟コンクールに優勝出来たこと、事故無くスムーズに開催出来たこと等、感慨一入であります。

(理事長)
 (社団) 日本吟道学院創立25周年記念事業実行委員会委員長

本部だより

平成十七年度春季昇段審査 結果報告

4月17日(日) 本会春季昇段審査会が、鷺宮地域センターに於て肅々と実施され、次のとおり決定されました。

| 少年の部 | | 一般の部 | |
|--------|-------|-------|-------|
| 初段 四名 | 二段 〇名 | 初段 四名 | 二段 三名 |
| 中伝 〇名 | 三級 〇名 | 三段 四名 | 三段 四名 |
| 八段 二名 | 計 〇名 | 四段 一名 | 四段 一名 |
| 準師範 三名 | | 皆伝 五名 | 皆伝 五名 |
| 師範 一名 | | 九段 九名 | 九段 九名 |
| 計 三四名 | | 秀伝 〇名 | 秀伝 〇名 |
| | | 十段 二名 | 十段 二名 |
| | | 範師 一名 | 範師 一名 |
| | | 計 二二名 | 計 二二名 |

(指導局)

☆ 次の方々が、平成十七年度正会員に加入されました。
 ご協力有難うございます。

- 一、高橋妙龍さん(若鷺教場)
- 一、広瀬美城さん(習志野会第一)

☆ 新入会員ご紹介

次の方々が入会されました。どうぞよろしく!!

- 白田ミヨ子(白鷺教場) 会員No.七〇五(16・9・8付)
住所等は名簿記載のとおり
- 菊池 充(習志野会第二) 会員No.七〇六(16・10・8付)
住所等は名簿記載のとおり
- 菅野由紀子(鷺宮教場) 会員No.七〇七(17・4・1付)
住所等は名簿記載のとおり
- 米長 明子(若鷺教場) 会員No.七〇八(17・5・6付)
住所等は名簿記載のとおり
- 岩本 治美(三菱吟道部) 会員No.七〇九(17・5・9付)
住所等は名簿記載のとおり
- 菅野 柚希(こだま教場) 会員No.七二〇(17・6・1付)
住所等は名簿記載のとおり
- 桑名富美子(龍富(鷺会第二) 会員No.七二一(17・6・7付)
〒一六〇〇〇三
- 荒川区南千住七一―五―一八―一五〇四 吉田方
☎〇三―三三八〇―一七〇四

飯坂幸太郎(幸吟)(鶴会第2) 会員No.七二二(17・6・7付)
〒二四二一〇〇二九 大和市上草柳二一〇一九
☎〇四六一二六二一〇四四三
井上 正子(平松教場) 会員No.七二三(17・9・1付)
〒一八五〇〇二二 国分寺市東元町一〇二一三七
☎〇四二一三二四八七四一(F兼用)

☆平成18年度定時総会&温習会

日程決まる皆様スタンバイして下さい。

◎と き……平成18年5月7日(日)一〇、〇〇〇
◎ところ……中野区野方区民センター

紅白ペア対抗戦に参加して

三菱・若鷺教場 佐藤 廣城

恒例の詩吟名人会の紅白ペア吟詠対抗戦に加藤杏城さんと一緒に参加しました。

当日は十四組の二十八名で競う事になり、私どもペアは皆さんの応援のお蔭で優勝しました。ありがとうございます。特に杏城さんの吟がすばらしく、それで優勝出来たものと思います。カップを手にして、リボンに記された先輩たちの名前に気づき驚いたのは、平成十年から八回のうち、五回も南洲吟道会の名を刻んで来たこととあります。先輩の方々のすばらしい活躍に感激を致しました。

当日は十六人の応援の方々に励まされ、また終了後も、温かい祝福を頂き、楽しい一時を過ごすことが出来有難く感謝するのみでした。実は私のこの挑戦に三度も機会を与えて下さいました理事長会長両先生のご配慮に感謝申し上げます。一回目は、平松玉祥さんでしたが、私がこけてしまい、立派に吟じた玉祥さんには、ご迷惑をお掛けしました。未だに申し訳なく存じています。しかしそのお蔭で私の吟への挑戦意欲をかきたてる機会を作って頂いたことに感謝しております。一回目は、

内山陽祥さんとの予定が病気の為変更となり、急遽永田遊祥さんとご一緒に挑戦したのです。私の間のとり方が悪く余裕のない吟で四位となっていました。それで今回は、『二重括弧』で充分息を吸い、落着いて吟じられるよう、日頃の練習を心がけました。



私は本番であがると絶句してしまう癖があり、練習時には出来たのにと、何時も地団駄を踏んでしまう。従って、どんなにあがっても詩文だけは絶句しないようにと、毎日壁に貼ったものを読んでいます。でも、当日出番が近づくにつれ、頭の中の詩文が途切れてしまい、何度も繰返し思い出すのに苦労しました。日頃、理事長先生から、吟じ込まねばならないと教えて頂いていますが、絶句した時は吟じ込みが足りなかったと反省しています。又場馴れすることで、前の時より少しでも進歩し、感動して頂ける吟を目指し、今後も挑戦して行きたいと願っています。

以上

私の「吟」

白鷺教場 加藤 杏城

先日の詩吟名人会・紅白ペア吟詠対抗戦に出場させて頂き、有難いことに優勝することができました。ペアということでも、自分の失敗がご迷惑をおかけすることになる!と思うと、いつもとは違った緊張感がありました。何とか無事に努めることができました。この場をお借りしてご指導いただいた洲神・龍陽両先生、ご声援下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

今までは「詩吟」というものを吟じるたびに、先生に言われたことができるようにと、何とか努力してきましたが、あくまでも先生の吟を真似しているにすぎません。また、吟の情感を出して風景が思い浮かべるようになるには程遠いものがあります。他流の方の学生世代や、二十代前半の方たちの吟を聞くと、綺麗な声でのびのびと吟じています。私は、どうしても力んでしまい、鼻声になってしまう所があるので、とても羨ましく思います。これからは、吟をのびのびと吟じ、また華やかに吟じられるように、勉強したいと思えます。

吟の中で、声をハルところ、抑えるところ、聞かせどころをメリハリつけてできるようにしたいのです。すばらしい先生に直接ご指導いただけることは、私にとってとても有難いことです。龍陽先生のご指導を受けながら、「私らしい吟詠」という形を作っていけたら、と思っています。

仕事で疲れても、詩吟で大きな声を出せば、とても心が晴々とし、何とも言えない爽快感があります。この爽快感を味わいたくて、毎週おけいこに通っています。声を出すだけで爽快感・リラックスが味わえるなんて、ン万円もかけてリラクゼーション施設に通うよりも簡単で経済的ですよ。詩吟に感謝です。

平成十七年春季昇段審査を受験して

船橋教場 曾根 富祥

本年度の春季昇段審査会は、去る四月十七日(日)、「中野区鷺宮地域センター」の三階ホールにおいて開催されました。当日は春の穏やかな晴天に恵まれ、朝十時から夕方五時まで、受験者は審査委員と大勢の出席者の前で、緊張した雰囲気

中、マイクに向かい、課題吟を披露しました。

審査委員は理事長の吉永洲神先生、会長の吉永龍陽先生をはじめ、副会長の松本龍江先生、公認審査員の橋本龍禱先生の四人の先生が担当され、受験者が吟じ終わる毎に、懇切丁寧な講評が述べられました。

私が頂いた講評は大切に、今後の練習などで活かしたいと思っております。一方、他の方が頂く講評も、参考になりました。良かった点や、前進のための指摘事項などを我が身に当てはめると、反省と課題に直結する内容が多く、大いに勉強になりました。

今回、私は九段を受験しました。課題吟の中より選択したのは「曾我兄弟」(松口月城作)と「心に太陽を持って」(ツェーザル・フライシュレイン作)の二つです。

課題吟は、「日本吟道」誌で前年の秋に発表されますので、早い段階から、準備はできる筈ですが、なかなか思うようにいきません。しかし、教室で吉永洲神先生より今回の「昇段審査予定者」の一覧が配布されて、自分が該当者であることが伝えられると緊張感が湧いてきます。

自分は受験する段位に相応しい実力があるのだろうか内心煩悶します。しかし、毎回、熱心な指導をいただいている先生に対して、お粗末な吟では申し訳ありません。課題吟の中より自分に合うものに焦点を絞り、練習に打ち込みました。私の「吟道研修証」を振り返ってみると、昨年の秋以降、今回受験した二つの吟題が、頻繁に練習記録として残っています。勿論、教室だけでは練習不足ですので、日常生活の中で練習時間を捻出することに腐心しました。さらに、「隙間時間」をできる限り活用することにしました。例えば、私は書道の授業で銀座まで通っていますが、往復の歩いている時や道の授業で銀座まで通っています。往復の歩いている時や駅のホームで列車が着くまでの時間や地下鉄に乗車している時などです。周囲の人に迷惑を掛けないように配慮しながら吟じていますが、時折振り向かれたりすることもあります。その時は途中で発声は止めて、詩文の暗唱に切り替えます。ともかく、範典のコピーは常時携帯し、自分の意識の中で詩吟が離れないよう心掛けました。

審査当日は暗唱で吟じようと思いましたが、不安が残り、範典のコピーは持参しました。それを見なくとも吟じなければならぬのに、甘さが残っていることを反省しています。このため、決して満足にはいきませんが、自分としては精一杯吟じたりです。

審査結果、合格と発表された時には非常に嬉しく、長年、ご指導を頂いている吉永洲神先生初め、当日、応援に駆けつけてくれた船橋教場の村田重龍さんやいつも和やかで楽しい雰囲気があり、時折、暖かいアドバイスを与えていただいた同教場の皆さんに感謝しております。今後は段位に相当する実力の維持向上と、新たな目標に向かって精進を続けたいと考えております。

審査会から早くも一ヶ月が経過しようとしている今も、昇段審査の余韻が残っています。詩文の一部が頭をよぎります。「曾我兄弟」の仇討ちのクライマックスの名場面や「心に太陽を持って」の人生に希望と勇気を与えてくれる寛容な内容などです。「詩吟」に出会えた至福の時を感じています。

渡辺龍神先生は、「詩歌朗吟の第一に心掛けなければならぬことは、詩歌の心をよく読みとって、その心を自分の感情に移すことである。これはやさしいようで中々むずかしい。だが一番大切なことである。」と述べておられます。(吟道教

典第一巻、序)また、渡辺龍神先生は、「詩吟はたのしいものです。たのしみながら吟じましょう。」と呼びかけられております。「詩吟上達法」はじめに、発行ひかりのくに株式会社(吉永洲神先生は、詳細な年間事業計画表の中で「人生は、総て健康第一です。予防に勝る名医はいない。」と述べられています。これらの吟道の基本と教訓を大切に、今後とも、元気に楽しく、詩吟を続けながら、心豊かな人生を目指したいと思っております。

継 続

平松教場 佐々木 節 城

昨年の春「吟士権に挑戦してみませんか？」との平松先生の言葉に、当日が自分の誕生日ということだけで受けてみたものの当然不合格。今年は早乙女さんと二人で再度挑戦。先生の厳しい指導に「今年こそは！」と必死で練習に励んだ。しかし再度不合格だった。

意気消沈の間もなく昇段審査に向かいお稽古が始まった。「お稽古を本番と思いつかり、吟題はお腹から声を出して、最後まで気を抜かず吟じる！」等々何度も注意される。時に落ち込んでいると「だからお稽古に来れるのよ。私も……」と優しく先生の体験などお話し頂いて、改めて吟の深さや難しさを感じ、又気を取り直してお稽古に通っている。

今年に入り杉本さんが加わり一層にぎやかに楽しくなった。先輩早乙女さんはお稽古に通う道すがら、その折々に納得の先輩早乙女さんにお稽古に通う道すがら、その折々に納得のゆく助言や感想をお話しして下さり、とても有難いと思っております。そして「佐々木さんが吟士権に向けて練習してすぐ上達したのを見て、私も挑戦しようと思ったの。」とおっしゃって頂きとても嬉しかった。

今年も、二人で不合格だった分頑張りねばと、昇段審査に向け、先生の丁寧な指導、そして厳しい注意に耳を傾けて真剣に取り組んだ。

当日、早乙女さんの感動の一語に尽きる「逸題」を聴かせて頂いた。「継続」の偉大さを改めて教えられた次第です。何事も継続が苦手な私ですが、この折々の感動を忘れずにお稽古に励みたいと思っております。

本当に有難うございました。

廻り道と路草と

白鷺教場 白 田 ミヨ子

永い永い七年間だった。やっとたどり着いた夢に迄見た教室、溯れば九年間。ポストに一枚のメモ書き。それは吟への誘い。これだ。私は迷わず通い始めた。この日から私の生活は一変した。その日に習った吟は、カレンダーの裏面に、何度も何度も繰り返し書き、解読し、暗記をした。炊事場・洗濯場・浴室・天井に張り付け、行く場所、行く場所で吟じた。

一日三吟。一年千吟を目標にし、励んだ。発声・呼吸・腹筋の練習。意識して姿勢に気をつけた。三年が過ぎた頃、母が

痴呆になり、徘徊が始まり介護の日々に明け暮れた。四ヵ月後母は自宅で息を引き取った。そして、仕事の関係で東京に転居。東京はあまり好きではないが、まあいいか。そんな気持ちだった。

そうだ東京には吉永先生が居る。頭に閃いた。気分一心。夏期大学講座の川口リリアで聞いたあの吉永洲神先生の吟。全身を奮い立たせ、ゾクゾクとする。あの余韻がたまらなく私の心を虜にした。何とも今も耳に残っている。そうだ。吉永先生の住所を調べ早速手紙を出した。何がなんでも、もう一度初心に戻って始めよう。私の心が動いた。早速案内のお手紙が届いた。嬉しくて、嬉しくて私は舞い上がった。もし、東京に来なかったら、吉永先生の教室を望まなかったと思います。

私って何てついているんだろう……。うふふ。きっと吟を辞めるな！と、先生に気持ちを通じたんだと私は感謝、感謝。先生の徹底した指導。廻り道、路草をしたけれど、何時も私は前向きな自分が大好きです。

初めての舞台。先生に云われた通り一つ一つ、心に念じ終了したときは「お」の発音が少し駄目だったかな？練習不足です。次回はしっかりと発音に気をつけて頑張りたいと思います。

温習会での反省

あやめ教場 浜 美城

振返って見ると、声を出してと言われて、どの様に出したら良いのか分からず戸惑い、声を出せなかった最初の授業から、幾分恥ずかしいけど出せる様になった今日この頃の自分。思い起せば紆余曲折色々あったが、先生からの叱咤激励の賜物に他ならない。

今回の温習会、先生の欠席と言う事態にしっかりせねばと取り組んでみたものの……。どうしてマイク一本でやったのよ！龍陽先生慌てて指示してたよ。進行係に言いに行ったら一本で良いと本人達から言われたって。先生が居ないから私が言うけれど……と大先輩。終ってホッとしていた私は、不覚にも「ごめんなさい。」と言いつつ涙してしまった。

何とか無事に早く終わって欲しいと言うやましい気持ちの表れだったが、皆の居る前でこの行為は、大先輩に対し非礼きわまりないものだったと反省している。

後でのアドバイスに、「吟も舞もあんたは引いてるでしょ。目が泳いでるもの。一〇年経ったってそんな気持ちだったら同じだね。引いてどうするの？舞台に立つという事がわかってない。先生に失礼でしょ。一生懸命に教えているのに……。」と言葉の数々を頂いた。

目からうるろこが落ちた大先輩の一言一言。砂に水がしみ込む様にすっかり胸に染み込んだ。感謝の気持ちで一杯である。そうよ！引いてどうするの？自分の気持ちに問いかけながら……。三分間は私の時間。私を聞いて下さいと思って。「と常に励まして下さった先生の言葉が甦って来た。自分なりに前向きに一步一步と心に誓った温習会だった。先生は勿論いつも先輩方の「お声掛け」を頂ける自分は幸せ者。

そんなステキな暖かい南洲吟道会に乾杯！！

栄えある優勝

中町会会長 小泉 龍 泰

社団法人日本吟道学院が、創立二十五周年を迎え、六月十二日、第五十回全国大会が、東京サンプラザ大ホールに於いて盛大に開催されました。オープニングは、眩いばかりに美しく整列した、会の代表による「富士山」の、厳かな大合吟でした。吉永洲神副総裁による、実行委員長開会の言葉に、東京に集う全国会員の心は一つになり、梅雨もはねのける熱気が、会場に満ち溢れました。

記念大会とあって、合吟コンクールも二〇名以上五〇名未満の各チームにより競われることになり、当会は、二十五名の優勝・準優勝経験者が選ばれました。私は五年振りに、大舞台に立つことになりました。

思い起せば、去る年の大会に、当会は、男女二チームが金・銀のメダルを独占したことがございました。夢中で吟じていたあの頃の自分が久し振りに甦り、練習に参加しました。目標に向かって、一致団結する素晴らしい南洲吟道会のパワーは、益々旺盛で、圧倒されました。吉永龍陽会長のご指導は厳しく、優しく、やる気を起させる、素晴らしいものでした。当日優勝を目指して、いざ本番に臨みました。「母を奉じて嵐山に遊ぶ」リーダーの発声に続いて、一同、心を一つに精一杯吟じ終わりました。どのチームも工夫を凝らし練習を積んだ立派な吟で、結果が気になりましたが、次の出吟「心に太陽を持って」の大合吟に、残る声を出し切りました。

楽しみにしていた特別構成番組「あゝ激動の日本史」は期せずして、特別構成番組「あゝ激動の日本史」は期待通り見事でした。

当会からは吉永龍陽先生の琵琶をはじめ、吉永龍奏、菊田正龍、湊山牙龍の吟士権者と、舞の永田宗岑、浜宗邦、西谷宗苑の皆様の熱演に、胸が熱くなりました。

いよいよコンクール結果発表の時を迎え、心のうちに願わくは、一位に入賞しますよう念じました。「優勝 四十七番南洲吟道会。」やりました。歓喜の瞬間です。先程返還した



平成17年6月30日(木) 於 サンプラザ
優勝記念祝賀会に集う、選手の皆さん

優勝杯は、又、南洲吟道会に還って参りました。記念祝賀パーティーでは、当会の相馬盆頂の踊りが、祝賀ムードを盛り上げ、アンコールを頂きました。

夜来の雨も上がった六月三十日、南洲吟道会合吟コンクール優勝を祝して、思いの出のサンプラザ十五階の一室に二十五名が集まりました。記念撮影の後、湊山牙龍さんの軽妙な司会で、楽しい祝宴が始まりました。先ず両先生に深く感謝、御礼を申し上げ、長友龍謡リーダーの健闘を讃えました。

吉永洲神副総裁は、これまでに大きな節目や大切な大会には幾度となく実行委員長として活躍されました。本日もご公務のため拍手でお送りした後は、女人の館となりました。芸人揃いの当会の面々、舞あり、歌あり、新舞踊の飛び込みありで、盛り上がること盛り上がること。

優勝カップのリボンは数えたら三十九本中十一本が南洲吟道会とか、いかに優れた指導者に恵まれていることか。私達は本当に幸せです。本日の集いのお膳立てをして下さった皆様に感謝しつつ、今後の益々の南洲吟道会の発展を祈念して、リーダーの三・三・七拍子の手づめでたくお開きとなりました。

古代日本の「詩」、「吟」、「歌」

習志野第二教場 菊池充吟

ここで古代とは、文学史上の上古、中古を指します。日本で一番古い韻文集は何か、と問われると、『万葉集』と答えて一番古い韻文集は何か、と問われると、『万葉集』と答えます。しかし、正解は、『懐風藻』という漢詩集です。西暦七五一に完成しています。日本の韻文集だから和歌集が古いのでは、と思いがちですから誤りそうです。当時、日本の文字である仮名はまだ発明工夫されていませんでした。『万葉集』では、表記はすべて漢字を使っています。いわゆる万葉仮名というものです。仮名を使わないで和歌を表記することは、きわめて困難です。漢詩なら漢字のみで表記することは当たり前のことです。

では、『懐風藻』から一首五言絶句を見てみましょう。『臨終』という大津皇子の作品です。

金鳥臨^ミ 西舎^ニ 鼓声催^ス 短命^ヲ
此夕離^{レテ} 家^ヲ 向^ウ 泉路無^シ 賓主^一

悲痛な詩ですね。参考までに『万葉集』にある彼の辞世の歌を引いておきます。

百伝^もふ磐余^{いはれ}の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや雲隠りなむ

大津皇子は天武帝の皇子で、一歳上の草壁皇子と共に有力な皇位継承者と目されていた。皇太子は草壁皇子で、大津は太政大臣であった。兄の草壁は病弱であったが、彼、大津は文武に秀で人望も厚かった。ここに悲劇の因があった。父天武が崩じると即、反逆罪として処刑された。

引用した漢詩と短歌はその刑場へ向う折に作られた、とされている。

五絶の承句に『催短命』とあるが、この時大津皇子は二十三歳であった。持統帝(草壁の母)にとっては姉大田皇女の子、大津が邪魔な存在であったのであろう。

現在の歴史家は、この事件は持統帝のフレイムアップ(でっちあげ)と見ている。理由は、大津の取巻き連や支持者の刑が大変軽かったからである。

さて、次は「吟」の歴史である。どこまで溯ることができるか。四字熟語『輾転反側』を調べていて、その説明が次のように始まっていた。

「詩経の巻頭に置かれた閑雠の詩は、孔子がその音楽の美しさを讃えたことで有名なもの。曲調は、今日知るよしもないが、まだ見ぬ理想の女性への憧れをうたう詩の心と、さぞかしよくマッチしていたことと想像される。

その四言古詩の最終句から出たことば。」

その古詩は、現代では見慣れぬ漢字があるので、意味だけ写すと、

ものしずかなよい娘を、寝てもさめても思い求める。求めても得られず、明け暮れに心をこがす。限りもないこのせつなさよ、夜もすがら寝返りをうつばかり。

今から、三千数百年前に編集された詩経のこの詩は、若者のナイーブな心がよく表現されている。「音楽の美しさを讃えた」とは大昔の孔子の春秋時代に唱われていたのである。

漢詩の題辭に「引」「曲」「吟」「詞」とあるのは歌の意です。現代日本でも「詩人」というのと、「作詞家」というのは別の意味をもっています。中国で詩(シー)と、詞(ツイー)は別の意味をもっています。別の意味をもっています。

次に、これより千数百年後の晩唐の詩人、杜牧の『秦淮に泊す』の転句と結句をみます。

商女は知らず亡国の恨み

江を隔てて猶お唱う後庭歌

妓女が唱っているのは『玉樹後庭花』という漢詩です。作者は国を自ら滅ぼした陳の国王、陳叔宝。晩唐でも恨み節である意味も知らず、妓女が酒家で唱っているのである。終わりに日本での話。

『平家物語』巻第七より。『忠度都落』の下り。和歌の師、五条の三位藤原俊成卿に勅撰和歌集の院宣が下たら、ぜひ私の歌の中に良い歌があったら、採用して欲しいと依頼して別れた後の叙述を原文より引用します。

『今は西海の浪の底にしづまば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮世に思ひおく事候はず。さらばいとま申て』とて、馬にうち乗り、甲の緒をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。三位うしろを見おくって、たれたれば、忠度の声とおぼしくて、『前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳』とたからかに口ずさみ給へば、俊成卿、いとど名残をしようおぼえて、涙をおさえてぞ入り給ふ。

忠度は『和漢朗詠集』の『餞別』より大江朝綱の詩の一節を朗詠したのである。

持永さんが逝って三年

習志野第一教場 畔 柳 弘 城

私たち習志野会のメンバーは、第一教場・第二教場・小林教場全員の約七割が谷津という町に住んでいる。

正しくは習志野市谷津という。谷津は、習志野市のなかで最も東京に近く、景気よかった頃海岸線が埋め立てられ、そこに高層住宅が建築され、今は東京のベッドタウンとなっている。街のほぼ真ん中を京成電車が走り、電車の線路をはさんで、海岸寄りを下の町。反対側を上町の町と私たちは呼んでいる。衣料品を商う店、八百屋魚屋と日常生活に事欠かない商店が並び、コンビニもある。飲食店に限っていえば、上の町、下の町ともに十数軒が点在しているが下の町の方が僅かだが店の数が多い。

その下の町にお好み焼を供する店がある。この店がっちりした体格で、いつも大声で笑っている何の屈託もない明るいママさんが、亡き持永さんの奥さんである。

声が大きいかお尻がデカイとか、客のたわいない悪口雑言にも笑って応じている。そして集まって来るお客の大半が南洲吟道会の皆さんである。習志野近在の人々のみならず、時折船橋教場からも足を運んでくださる先生方の顔も見える。ここの客席は何時も賑やかで、詩吟について語る人、詩文について蘊蓄を傾ける人、果ては政治・経済まで話題はつきない。教室では味わえない会話が行き交う。さながら三文文士の集まりである。どの人も少々お酒が入っているので論旨がだんだんあやしくなってくる。まあそれはそれとしてまさかだんだんまやしくなってくる。まあそれはそれとしてまさに憩いの場である。

吟友でもあるこのママさん、亡くなった持永さんもそうであったが、声がすばらしい。へにゃへにゃした男性では太刀打ちできない。堂々とした発声と明瞭な発音、聞く人の心を打つものがある。

とりわけ発声の悪い私には、大いに勉強になる。毎回教室で下腹から声を出せ、声を引くなと叱咤されるがこれを直すのが難しい。下手なくせに人並みに聞かせようとするとすかすかも知れない。背筋を伸ばし、下腹に力を入れて声を前に……。吉永洲神先生、そして広瀬先生が、常々言われる基本そのもののお手本がこんなに身近にあるにもかかわらず、一向に上達しない私は、もともと詩吟を習うのには資質に欠けているのかもしれない。自信がないから声が出ない、声が出ないから迫力がない、悪循環である。

吟の神様、助けて下さい。最後は神頼りしかない。練習に勝る何物もない。ひたすら吟ぜよ、詩文を声を出して読め。神様の声が聞こえてくる。

「天国の持永さん、力を貸して下さい。」練習に勝る何物もない。ひたすら吟ぜよ、詩文を声を出して読め。今は亡き持永さんの声が聞こえる。

「持永さん、そちらはどうですか。数日前に奥さんのお店も開店三周年を迎え、広瀬先生、成田さん、香取さんをはじめ沢山の人が集まり、お祝の飲み会を行いました。

そちらでも、お馴染みのお店は出来ましたか。……毎晩やっていますか。

奥さん極めて順調。ご安心下さい。」

義母を想う

習志野第一教場 広 瀬 美 城

私が、詩吟を習い始めて七年目の年でした。とても元気な義母でしたが、神経痛が悪化して車椅子の生活を余儀なくされたのです。

それまでに経験したことのない車椅子の生活に、義母はすっかり落ち込んでしまいました。闘病する義母も大変でしたが、看病する側も、どうしたら良いのか困惑してしまいう事も度々でした。

その義母を勇気づけたのが『詩吟』だったのです。義母の足をなでながら「母を奉じて嵐山に遊ぶ」「夜墨水を下る」など下手な吟を口ずさんでいると、常々歌う事の好きな義母の口から、「伴奏は何でやるの」と質問ができました。どうやら興味を持ったようでした。コンダクターを出しておもむろにひきますと、「へーいい楽器があるんだね」と感心しておりました。

初めて耳にする吟調の素晴らしさに感動したのでしょう。段々と明るくなって行く義母の姿を見ていると、「下手な詩吟でも聞いてもらうことが出来て、本当に良かった。」としみじみ思いました。そして、いつの間にか一緒に口ずさむようになっていったのです。

その義母も風邪をこじらせ九十歳でこの世を去りました。お墓参りをする度に「お義母さん、今でも詩吟を続けています。が、なかなかうまくなれず悲しいです。」と、手を合わせています。黙って、静かに微笑んでいる義母の顔が浮かんで参ります。

軽い気持ちで始めた詩吟でしたが、十年以上も続けてこられましたのは、吉永洲神先生、吉永龍陽先生はじめ広瀬先生そして吟友の皆さんの支えがあったからこそと、心より感謝致しております。

最近の私は、六十歳を過ぎた頃からボランティア精神に少し目覚め、市で行っている誰でも豊かに、安心して暮らしていける地域社会を目ざして、福祉の増進を図ることを目的に「いそしぎサービスマスター」を開設することになり、知人の紹介もありまして、現在はその会の一員として活動させて頂いています。

『一期一会』を大事にし、初めて出会う皆さんと明るく前向きに頑張っておこうと思っております。

吟友の皆様、今後ともよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

編集後記

会報36号の発刊に当たって、投稿下さった方々に先ず心より感謝申し上げます。当初八月は、各教場とも夏休みに入るので七月中に会員の皆様に配布できるようにと考えて居りましたが、行事が山積しており投稿して下さる方が少なく七月中の発刊を断念致しました。広報局内での話し合いでは、会報は年に三回（一月・五月・九月）発刊の予定で今日まで来ました。

各教場だよりもいつの間にか投稿がなくなり、各教場の様子が聞こえなくなったのが、本当に残念に思います。次回37号よりまた各教場だよりを掲載して参りたいと思しますので、何卒ご協力下さいますようお願い申し上げます。編集後記とさせて頂きます。

（広報局長）